教育会報
第二号
発行・編集
鹿児島県教頭会
〒892－0836
鹿児島市錦江町２－16
鹿児島県公立小・中学校
教頭会会館県教頭会事務局
TEL　099-226-8268
FAX　099-822-5580

平成二十六年度を振り返って

鹿児島市立坂元台小学校
副会長　川畑　幸博

昨年十月、鹿児島県出身の赤﨑勇先生のノーベル物理学賞受賞の明るいニュースが県内を駆け巡りました。この研究開発に四半世紀かけていると言われます。この長きに渡る研究は、「あきらめない力」があり、この力は「鹿児島が私の精神風土を築き上げた」とインタビューで答えていらっしゃいました。本県に住む者にとっては、うれしい話です。この偉業が日本の科学技術振興に大きな弾みになることと思います。また、小中学生の「理科好きな子」が増えることを期待するとともに学校教育で育てていかなければならないと考えるところです。

さて、今日、教育を取り巻く状況は急速なスピードで進行しています。道徳の教科化、小学校における英語の教科化、中学校英語の高度化、大学入試制度改革など枚挙にいとまがない状況です。さらに土曜授業の実施、学力向上の具体策等、今後各学校で教育課程編成において創意工夫を凝らした立案・実践をしていかなければなりません。

ところで、本県教頭会では十一月十九日、二十日に第四十八回鹿児島県公立小中学校教頭会研究大会を開催いたしました。

第十期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」のもと、本年度は第一年次でキーワード「生き抜く力・絆づくり」としています。「生き抜く力」は、生きる力を含み、生涯にわたって自立・協働・創造する力を習得することを目指しています。「絆づくり」は、お互いに助け合う、共に助け合う活力ある連携や協働体制づくりを目指しています。本研究大会一日目は開会行事の後、鹿児島純心短期大学名誉教授の小川学夫先生に「郷土から学ぶことの意味」を演題にして、島の文化や鹿児島の文化のそれぞれのよさを認識し、多様な価値観を認めることの大切さ、郷土教育を進めていくことの大切さ等、多くの示唆をいただきました。今後の研究実践に生かしていこうと思います。

二日目は、五課題七分科会に分かれて各地区で取り組まれた研究実践が発表され、熱心な協議が行われました。新しい地区編成になり、共同研究という点で時間的地理的制約の中、連携を図り、研究・検討・準備等を進めることに大変御苦労されたと思います。貴重な提言・準備ありがとうございました。

最後になりましたが、公務御多用な中、懇切丁寧に御指導・御助言いただきました県教育委員会をはじめ、市長村教育委員会や連合校長協会、関係諸機関の方々、並びに本会の運営に携わってくださいました皆様方に、会員一同心から感謝とお礼を申し上げます。

なお、平成二十七年度は、第五十五回九州地区公立学校教頭会研究大会並びに第四十九回鹿児島県公立小中学校教頭会研究大会を、城山観光ホテル・市民文化ホールを会場として八月に開催いたします。それに向けて、提言者の方や係の方には、例年と違い、早い準備になり、無理を申し上げることになると思いますが、会員の先生方の御協力をよろしくお願いいたします。

各地区の活動状況

鹿児島市　小学校

鹿児島市立武岡台小学校
山下　佳子

一　地区の概要

本地区小学校部会は、市内七十九校（会員八十六名）で組織し、鹿児島市教育委員会の指導のもと、研究を推進し、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

本地区は、十二ブロックに分かれ年間5回行われる市教頭会でブロック別に自主研修を行っている。

各ブロックでは、実践的な事例発表や情報交換を中心に、校長の補佐役・教頭としての資質向上と、学校教育活動の充実を図る方策を話し合っている。

本年度の県教頭研究大会では、「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を研究主題に「教育課程に関する課題」「教育環境整備に関する課題」「教職員の専門性に関する課題」の3つの分科会で提言を行った。

年度末には、ブロックごとに研究成果と課題を「市教頭会研究紀要」としてまとめ、毎年発行・共有化している。

今後も各校の実践事例を基に、更に教頭としての資質向上に向け、努力・研鑽を重ねていきたい。

鹿児島市　中学校

鹿児島市立谷山北中学校
三原　秀樹

一　地区の概要

本地区中学校部会は、学校数三十九校、会員四十二名で組織され、昨年度までの六ブロックを本年度から七ブロックに再編し、研究を行っている。鹿児島市教育委員会の指導のもと研修を行い、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

会員は、年五回実施される市教頭会やその他の研修会の中で、

研究課題の解決に向けて取り組んでいる。平成二十六年度県教頭会研究大会では、これまでの研修の成果を第五A分科会で研究提言として発表することができた。

年度末には、各ブロックの研究成果を「研究紀要」にまとめ、各学校での実践化につなげている。

平成二十八年度には、九州大会において第四分科会での提言が予定されているため、本年度から少しずつ準備を進めているところである。

今後も、お互いの実践を持ち寄り研究を深め、その成果を共有していきたい。

鹿児島地区

いちき串木野市立川上小学校　大戸　徹三

一　地区の概要

本地区は、平成二十六年度より、日置市・いちき串木野市・三島村・十島村で構成され、会員数は五十二名(小学校三十九校・中学校二十三校)である。鹿児島教育事務所及び、各市村教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

地区全体での研修会は、五月と十月の二回開催され、事務所長講話をはじめ講演や情報交換が行われた。

第一回目は「授業や校内研修の充実を図るためのICT活用」、二回目は「地区重点課題心の教育・学力向上・服務の指導について」の内容で協議し情報交換を行った。

十一月の県教頭会研究大会では『子どもの発達に関する課題』(特別な支援を要する児童への組織的・計画的な対応を進めるために、教頭としてどのようにかかわればよいか)をテーマに東市来ブロックが提言を行った。

また、本地区では、旧市町と村を地域とした教頭会が運営されており、各地域研修部長を中心にそれぞれの課題に向けた研究等実践的に取り組んでいる。

南薩地区

南九州市立手蓑小学校　川邊　真人

一　地区の概要

本地区教頭会は、南さつま市、南九州市、指宿市、枕崎市の四市の会員(小学校五十一校、中学校十九校)で構成され、南薩教育事務所及び各市教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭の資質向上に努めている。

二　活動の状況

六月の南薩地区教頭研修会後に、南薩地区教頭会として研修会を実施した。組織の概要や年間計画を確認し、研修会後に情報交換会も開催し親睦を深めた。

各市教頭会では小中一貫教育、コミュニティースクール、学力向上、土曜授業の在り方等について自主研修会を行った。十一月の県教頭会研究大会では南九州市教頭会より「小小連携で学力向上にむけた取組を推進する教育課程」の提言、指宿市教頭会より「地域の人材活用を学校組織・運営の活性化に生かす手立て」に関する提言を行った。会員の取組については、地区教頭研修会誌「教育なんさつ」にまとめている。

北薩地区

さつま町立柊野小学校　中村　勲

一　地区の概要

本地区教頭会は、出水・川薩の三市二町、小学校八十三校・中学校三十四校(休校一校)からなり、会員数百十八名で組織している。

北薩教育事務所及び各市町教育委員会の指導を仰ぎ、教頭としての資質向上を目指して研究に取り組んでいる。

二　活動の状況

地区教頭研修会は五月に実施され、所長講話や教育事務所の重点事項の説明、学校の活性化をテーマに、「人事評価」「職員の資質向上」を目指した研究協議等が行われ、各種教育課題の解決に向けた有意義な研修の場となった。

また、各市町教頭会では、研究グループ毎にそれぞれの現状や課題を踏まえたテーマを設定し、教頭としての関わり方を踏まえながら実践的、主体的な活動を進めることができた。

県教頭研究大会では、本地区から「教育課程」及び「教職員の専門性」に関する課題として「小中一貫教育」「校内研修の充実」について三本の提言がされた。どれも継続的に研究・実践を積み重ねた素晴らしい内容であった。

県教頭研究大会での発表内容や各研究グループの具体的な取組等は、地区教頭会研究誌「あしたを拓く」にまとめ、相互テーマとした研究協議やワークショップに取り組んだ。姶良・伊佐教育事務所作成の「教頭職ハンドブック」を活用しながら、具体的な場面を想定した指導プランの作成を行い、職員指導のスキル向上に努めた。十月の研修会では、授業参観の視点や指導助言のポイントについての事例発表やワークショップ、学力向上についての講話等を通して、「教頭としていかに授業改善に取り組むか」についての研修を実施した。授業力の向上を目指した具体的な指導内容や改善策について研修する中で、相互の資質向上が図られた。

また、年度末には各市町や学校の研究状況、随筆等をまとめた

姶良・伊佐地区

霧島市立福山小学校　新村　博文

一　地区の概要

本地区は三市一町で構成され、小学校六十九校、中学校二十五校からなり、会員数九十六名で組織している。

姶良・伊佐教育事務所並びに各市町教育委員会の指導を仰ぎ、教頭としての資質向上を目指して、日々研修に取り組んでいる。

二　活動の状況

地区教頭研修会は、五月と十月の年二回開催している。五月の研修会では、県・地区の教育行政重点施策に係る指導のほか、「教師魂を呼び起こす職員指導」を

大隅地区

東串良町立柏原小学校　川﨑　正

一　地区の概要

大隅地区教頭会は、四市五町の小学校九十三校(休校二校含)、中学校三十四校(休校一校含)で構成され、会員数百二十六名で組織している。大隅教育事務所及び各市町教育委員会の指導の下、教頭としての資質向上を目指して日々研修に努めている。

二　活動の状況

①　地区の全体研修

地区教頭研修会は、大隅地区全体として年二回(五月と十月)

実施された。地区教育行政の重点施策に係る指導等の他、一回目は「校長の目標の具現化を図るための教頭の取組」について、二回目は「確かな学力の定着と小中連携の充実」について研究協議・講演会等が行われ、充実した研修会となった。

②各市町における研修

各市町の研究テーマや年間計画に基づいて実践を進め、その一端を県教頭会研究大会でも発表した。

本年度の発表等を通して、また、来年度の発表等に向けて、「内省的思考による研究」及び「3C（継続性と協働性、関与性）」に焦点を当てた実践的研究を進めていく。

熊毛地区

中種子町立野間小学校　山﨑　和正

一　地区の概要

熊毛地区教頭会は、一市三町からなり、小学校三十三校、中学校七校の会員三十九名で組織している。

熊毛教育事務所をはじめ、各市町教育委員会の御指導・サポートのもと、教頭としての資質向上を目指し日々研修に努めている。

二　活動の状況

本地区では、年二回（五月・十月）の地区教頭研修会が開催され、事務所長講話を始め、県・地区の教育行政重点施策に係る指導等が行われた。また研究協議では、第一回（五月）は「こだわりの視点を徹底させるための教頭としての取組・う歯治療率向上に向けた取組」、第二回は「各校で特に力点を置いている教育実践」のテーマを設定し、教頭同士の意見を活発に交流させることができた。

市町ごとの教頭会でも、各学校の実践事例をもとに、研修を推進することができた。さらに、九州地区公立学校教頭会研究大会（福岡大会）と県小・中学校教頭会研究大会の二つの研究大会において、中種子町教頭会が「教職員の授業力向上を図るための教頭としての取組」の提言発表を行う等、充実した研修をすることができた。

大島地区

奄美市立奄美小学校　田丸　武彦

一　地区の概要

本地区教頭会は、一市九町二村で小学校八十二校、中学校四十八校、会員百十名で組織されている。

大島教育事務所及び各市町村教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭としての資質の向上に努めている。

二　活動の状況

①地区全体での研修

地区教頭研修会は五・九月の二回開催され、事務所長講話を始め教育事務所の重点事項の説明等が行われた。また、研究協議では、ワークショップやポスターセッションが取り入れられ、活発な情報交換をすることができた。

②研究紀要の発行

市町村ごとに一年間研修したことをまとめ、大島地区小・中学校教頭会研究紀要を発行している。今回は三十三号。各市町村の活動報告に加えて、随想等を載せることで親しみやすい紀要にした。

③地区代表者会の開催

各市町村代表者が参加し、年間活動の反省と次年度の計画についての協議した。また、組織力を高めるリーダーの在り方について、講師を招いて講演会・情報交換会を開き、資質向上と組織の充実を図っている。

随想

いもこじ

鹿児島市立武岡台小学校　山下　佳子

「いもこじ」という言葉をご存じだろうか。これは里芋の泥を落とすためにたくさんの里芋と適量の水を桶に入れ、長い棒でかき回すことである。この棒は「芋こじ棒」と呼ばれる。

かの二宮尊徳は、たくさんの芋が触れ合ってきれいになるように、多くの若者が交流を持つことで、互いを磨き合うことを勧め、このような学び方を「芋こじ」と呼んだ。「こじる」の意味は「傷つけないように力を加減し、道具を使って動かす」ということである。

最近の子どもたちを見ていると、自主自立力が足りないと思う。教育現場もそうだが、あまりにも大人が手を加えすぎてはいないか。勇気を持って負荷を与え、ぶつかり合わせ、我慢させることが必要である。子どもは子ども同士、人間として美しく厳しく磨き合えると信じている。我が薩摩には、脈々と流れる郷中教育という宝があるからである。

そこには教師力が不可欠である。教師＝教える人と解釈されることが多いが、私は、教師＝「芋こじ棒」であって欲しいと思っている。教師は、芋同士が傷つかないよう見守りながら、芋の状況に合わせ、絶妙なタイミングで「棒」をかき回せるようになって欲しい。芋の状況を「見極める力」は、長年の経験と教師自身の努力で、身に付いていく。「芋こじ棒」の極意こそ、子どもの自主自立力を高めるとともに、一流の教師へと導く方策である。我々は今こそ、覚悟を持って、意図的・計画的に「いもこじ」の場を作り、「芋こじ棒」となって、子どもたちを磨いていこうではないか。

随想

「学校再建の源、承認の欲求」

鹿屋市立鹿屋中学校　桑鶴　明人

現在約六〇人に参加の輪が広がった通称朝トレ。早い生徒で六時四〇分には校庭を颯爽と走り抜く。そして、七時、朝練習を始めた野球部員たちが、先生方の姿を遠くに見つけるやいなや発する「おはようございます」の声が響きわたる。七時三〇分、生徒が次々に登校してきて、門で迎える先生方との元気いっぱいの挨拶の交換。八時、静かな中で全校生徒が一斉に朝読書を開始。…早朝の一コマだが、学校生活全般の落ち着きと活気を物語っている。

しかし、この状況がずっと以前からあったわけではなかった。つい三年前までは、生徒指導困難校といっても過言ではなかったのが偽らざる事実である。これを一転させたのは何だったのか。全職員が本腰を入れ一枚岩になっての行動。生徒指導の「さしすせそ」の徹底推進。それも大きな要因に違いないが、忘れてはならないことがある。それは、当時、例に漏れず学校の悪環境に染まっていた吹奏楽部。指導に手を焼いていた顧問のH教諭が、あることを機に、部員にボランティア清掃を提案したところ、二つ返事でOKの回答。そして軽い気持ちで始めた行動が、思いもよらず多くの先生方からの賞賛を受け、彼女らの意欲は最高潮に。吹奏楽部のこの取組は今もなお続き、伝統的取組となっている。その影響は全校生徒に少しずつ着実に広がっていった。

マズローは、人が持つ重要な欲求の一つに承認の欲求を挙げている。この欲求が満たされる環境の創造こそ、学校の務めであることを今一度確認したい思いである。

私の勧める一冊の本

『神様のカルテ』

著者　夏川草介
小学館出版

南九州市立清水小学校　松久保　鉄也

主人公の栗原一止は、自然あふれる信州松本の医師不足の問題を抱える病院で診療をこなしている。

この本を読む前、私は妹を病気で失っていた。だから「医者が何の役に立つのか。」という医療への不信感が、心の中に横たわっていた。

しかし、この物語はその暗闇に暖かな陽だまりをつくり、さらに理想の姿をその陽だまりに写し出してくれた。

それは、どの病院からも見放され一止を頼って入院した患者が亡くなる時に、一止から放たれた言葉である。「点滴等を用いて、絶える命を引き延ばしているなどと考えては傲慢だ。もとより寿命なるものは人知の及ぶところではない。最初から定めが決まっている。土に埋もれた定められた命を、掘り起こして光を当て、よりよい最期の時を作り出していく。医師とはそういう存在ではないか。」

自分の向き合っている人が人として輝けるように〝手助け〟するという姿にハッとさせられた。常に相手に寄り添い、相手のために自分の持てる力を最大限に発揮する。地位や名誉ではなく、今いる場所・現場で、悲しみの湖に沈んでいる人の力になりたいという想いに心振るわせると同時に、「教頭」である自分に必要な姿だと感じたのだ。

また、魅力的な脇役達にも心躍らされた。同じ内科で一止を信頼している上司の大狸・古狐先生、大学時代からの腐れ縁の同僚医師、ドジな一面のある一止のフォローをしてくれる看護師達。そして、プライベートで一止を支える妻。その全てが「人のために精一杯尽くす」陽だまりのような姿を持っているのだ。

さらに、文体も興味をそそる。一止の愛読書「草枕」の時代を彷彿とさせる言葉遣いも、昭和に生まれ平成を生きる私に新鮮な感覚を吹き込んでくれた。加えて、物語のクライマックスに出てくる一止の名前に組み込まれたカラクリにも感嘆を覚えた。

最後に、本物語の続編である第2部の主題の一つは「仕事とプライベートの葛藤」で、こちらも強力にお勧めだ。

私の勧める一冊の本

『置かれた場所で咲きなさい』

著者 渡辺和子
幻冬舎出版

中種子町立納官小学校
山口 耕

新任教頭として本校に赴任した。四月初旬、職務も生活環境もそれまでと大きく変わり、新たな体験の連続。目まぐるしく一日が過ぎる。家族も新たな環境で戸惑うことも多かったようだ。「これからどんな教師人生を歩むのだろう。家族の暮らしは、どうなるのだろう。」夫婦で途方に暮れていたことを覚えている。

それから間もなく、この本と出会った。職員会議の締めくくりで校長先生が紹介された一冊の本。タイトルにひかれ手に取った。

本書は、大学学長を務めた筆者自身の多くの人々との出会いや心に残った言葉が、小題のついた短い文章でまとめられている。

表題の「置かれた場所で咲きなさい」という言葉は、筆者が自身の置かれた境遇に嘆いている時、知人から贈られた詩の一節である。「咲くというのは、仕方がないと諦めることではない。笑顔で生き、周囲の人も幸せにすること」で、「置かれた場所こそがあなたの居場所」であるという。また、「他人任せにしてはいけない。自らが積極的に動いて初めて幸せを手に入れることができる」「どうしても咲けない時は、無理して咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へと降ろして根を張るのです。次に咲く花がより大きく、美しくなるために。」という言葉があり、私の心に沁みた。

私は、無意識のうちに環境の変化にばかり目を向けていることに気付かされた。「学校や地域に対してどれだけはまるかだ。」そういう思いで日々を過ごすと、心が軽くなり前向きに物事を考えられた。家族も多くの友ができ、少しずつ居場所が広がってきたようだ。まだまだ職務を十分にこなしているとは言えないが、今の学校で、日々花を咲かせ根を深く下ろし続けられるよう過ごしていきたい。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

新任教頭雑感

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校
上久保 大介

平成二十六年四月三日、私は県立鴨池野球場にいた。目の前では鹿児島玉龍高校野球部の準決勝が行われており全校生徒が応援に来ていた。「三日前は指宿市にいたはずなのになぜ私は学校ではなくここにいるんだ？」生徒たちは一生懸命応援しているが私の気持ちは至って冷静である。「この温度差は何だ？」私には実に不思議な光景に見えた。本校は中高一貫教育校で、高校と同じように中学生も参加する全校応援が普通にある。中高合同で行う活動は他にもたくさんあり、これまでの学校との違いに戸惑うことばかりである。本原稿は新任教頭雑感というタイトルだが、実は私は以前も教頭経験があり、九年のブランクを経た上でのいわば再任用である。小学生の頃、太陽の向こう側には地球とまったく同じ惑星があり、そこには自分がもう一人いて同じ生活を営んでいるというＳＦを見たことがある。この九年のブランクはタイムマシンに乗り、もう一つの地球にたどり着いたような感覚である。知っているはずなのに知らないことがある。特に本校にはそういうことがたくさんある。中高一貫教育校の特徴を生かした教育課程、徹底した学習指導に多彩な活動等、初めてのことが多く若いときと違い、理解に時間がかかる。特に中高合同の学校行事は終わって初めてイメージが完成する。それでも生徒がいることは楽しいし、日替わりランチのように毎日いろいろなことが起こり、おもしろい。四月四日、決勝戦の応援ではすでに私も玉龍の一員になっていた。四月五日、応援の疲れと緊張で腰痛を発症し、私の新しい学校生活が始まった。

◆ ◆ ◆

新任教頭雑感

霧島市立向花小学校
南　健

本校は、霧島市国分の市街地に隣接した場所に位置し、交通の便にも恵まれ、比較的便利な場所にある。このような場所にありながら今なお、地域行事や子ども会活動などがしっかりと受け継がれ行われている創立百三十六年目を迎えた伝統校である。

このような素晴らしい伝統校へ四月に赴任してきた。最初に目に飛び込んできた色とりどりに咲き誇る花壇の花々。そして、校庭で遊んでいる子どもたちがかけてくれた元気のよいあいさつ。しばらく行政に身を置き、学校現場から遠ざかっていた私にとっては、とても新鮮な気持ちと同時に、初めての教頭職に対する不安な気持ちで一杯であった。

いざ実務が始まると、次から次にやってくる公文の処理。そして、同時進行で行わなければならない様々な報告物の作成。しばらくは、目の前の掲示物さえ気づいていない状況であった。このようなさまざまな業務を行う中で、学級担任をしていた頃は全く知らなかった業務の多さに驚く。これまで幾人かの教頭先生のもと、学級担任として一緒に仕事をさせていただいた。思い返すと、いずれもがその大変さを感じさせることなく、スマートに業務を進めておられた。職員の相談には親身になって応じ、冗談を言っては場の雰囲気を和ませ、時には厳しく指導をしていただいた。教頭職に迷う時、かつて職場を共にさせていただいたこのような先輩方の姿が、今の私のモデルとなってヒントを与えてくださっている。未熟な教頭であるが、熱意と愛情を持って学校や地域に貢献していきたい。

自由題

本物

いちき串木野市立羽島小学校
栗山　稔久

これまで多くの先輩教師に影響を受けてきた。特に、三人の先輩の姿はいつも頭に浮かぶ。

一人は、三校目一年目に出会った学年主任。いつも子どものことを考え、いつも子どもに寄り添う心温かい先生であった。担任教師としての心構えを全て教えてもらったと思っている。二人目は市教委に勤務した時の上司。今時珍しいぐらい部下をよく叱る厳しい上司だった。でも何よりも自分に厳しい方で、その言動全てがいつも理に適っていた。三人目は現任校の校長。決して多くは語らずとも、その行動（背中）だけで職員に範を示す。その背中はとてつもなく大きい。なぜ、この先輩方に影響を受けたのか？ 先輩方は全くタイプや立場は違えど、ある共通項があることに気づく。それは「強い職責感」。自分の仕事に強い決意で臨み、準備を整え、ぶれず、こだわり抜く。結果、いい仕事に繋げる。いつもカッコいい。これぞ「本物」と言える。

四月、はじめて教頭職に就いた。勿論その仕事は甘くはない。弱い自分がいて時に心が折れそうになる。逃げ出したくなる。そんな時、校長の背中が言う。「甘えるな。」と。

若く優秀な教員が育ってきている。そんな後輩たちに果たして私たち中堅はどのように映っているのか。三人の先輩のように、強い職責感をもって仕事に取り組みたい。いつの日か多くの後輩から信頼される「本物」になりたい。

たとえば〝窒素〟のように

奄美市立知根小学校
永野　裕美

六年生の理科で、空気の組成とその性質について学習する。酸素だけが入った瓶の中で明るく激しく燃える線香の炎を見て、子どもはその働きに魅了される。次に、窒素だけの中で同様の実験をすると、線香の炎が消える様子に子どもたちも少々がっかり。そこで子どもたちに、「物を燃やす働きのない窒素は必要か。」と問う。すると子どもたちはしばらく考えた後、「酸素だけでは、地球上は火事だらけ。窒素のおかげでバランスがとれているんだよ。」と答える。そこで窒素の存在の価値や空気の組成の素晴らしさ、そして、無駄なことなんてない、全ての存在に意味がある…そんなことを感じ取っていく。

この職に就きたての私は、今までと違う仕事内容に悩むことも多い。そんな中、子どもたちと語り合ったことを思い出した。そして、担任の先生方が子ども一人一人の可能性を輝かせようとする酸素であるならば、私はそれをバランスよく支える窒素でありたい。無駄に思えるようなことも、全て子どもにつながっていると信じて、目の前の一つ一つを大切にしよう―そう思えるようになった。

自然の中のきまりは、時にさまざまな物の見方を与えてくれる。自然豊かな奄美の地に身を置き、その素晴らしさを感じながら、子どもや保護者、地域、そして学校の姿を見つめ、少しでも役立つ仕事をしていきたい。